アブラハムが生まれる前から存在しているお方

ヨハネ福音書8:48-59
【新改訳 2017】

8:48 ユダヤ人たちはイエスに答えて言った。「あなたはサマリア人で悪霊につかれている、と私たちが言うのも当然ではないか。」
8:49 イエスは答えられた。「わたしは悪霊につかれてはいません。むしろ、わたしの父を敬っているのに、あなたがたはわたしを卑しめています。
8:50 わたしは自分の栄光を求めません。それを求め、さばきをなさる方がおられます。
8:51 まことに、まことに、あなたがたに言います。だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を見ることがありません。」
8:52 ユダヤ人たちはイエスに言った。「あなたが悪霊につかれていることが、今分かった。アブラハムは死に、預言者たちも死んだ。それなのにあなたは、『だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を味わうことがない』と言う。
8:53 あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのか。アブラハムは死んだ。預言者たちも死んだ。あなたは、自分を何者だと言うのか。」
8:54 イエスは答えられた。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光は空しい。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。この方を、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。
8:55 あなたがたはこの方を知らないが、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしもあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っていて、そのみことばを守っています。
8:56 あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見るようになることを、大いに喜んでいました。そして、それを見て、喜んだのです。」
8:57 そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのに、アブラハムを見たのか。」
8:58 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです。」
8:59 すると彼らは、イエスに投げつけようと石を取った。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。

【祈りながら考えよう】

（１）48節の「あなたはサマリア人で悪霊につかれている」とはどういう意味ですか。

（２）51節の「だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を見ることがありません」と言われたのはどういう意味ですか。

（３）58節の「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです」とはどういう意味ですか。

【解　説】

（１）あなたはサマリア人で悪霊につかれている

主イエスとユダヤ人たちとの論争が続いているところであるが、主が彼らのことを神の子ではなく、悪魔の子であると言われたことから、彼らは怒り出し、こう言った。「**あなたはサマリア人で悪霊につかれている、と私たちが言うのも当然ではないか**」　主をサマリア人と呼ぶことで人種的な侮辱をした。

主はなぜ彼らが悪魔の子だと言われたのかと言うと、彼らは真理に敵対しているからであった。彼らはそのことが分からない。それどころか自分たちはりっぱな「アブラハムの子孫」であると思っていたから、おかしなことを言う主イエスこそ悪霊につかれているということにしなければいられなかった。

それに対して主はどう答えておられるかと言うと、

「わたしは悪霊につかれてはいません。むしろ、わたしの父を敬っているのに、あなたがたはわたしを卑しめています。わたしは自分の栄光を求めません。それを求め、さばきをなさる方がおられます」

（２）わたしのことばを守るなら、いつまでも決して死を見ることがありません

こう言われてから、主はいつも重要なことを言われる時に使われる「**まことに、まことに、あなたがたに言います**」と前置きされてから、こう言われた。

「だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を見ることがありません」

ご自身が神でなければ決して発することのできない驚くべきことばである。

ここで主が「**守る**」と言われた言葉は、宝物を保管するように大事に守るという意味であるから、主の御言葉をいいかげんに扱わず、それに心から従う態度で守るということである。つまり、信仰を持って御言葉を心から受け入れ、それを心のうちにたくわえ、また自分の生活に適用し、その御言葉の意味しているところに従って生きることである。

次に「**死を見ることがありません**」と言われたことについて考えてみる。毎年多くの信者が死ぬことからすると、これは「肉体の死」のことを言っているのではなく、「霊的な死」のことを言っている。

主を信じる者は「永遠の死」を免（まぬが）れ、地獄の苦悶に会うことが決してない、と言われている。これは、主の恵み深い約束である。

（３）アブラハムはわたしの日を見るようになることを大いに喜んでいた

これを聞いたユダヤ人たちは、主が語っておられることがさっぱり分からなかった。イエスが「精神錯乱」している、と考えた。

「あなたが悪霊につかれていることが、今分かった。アブラハムは死に、預言者たちも死んだ。それなのにあなたは、『だれでもわたしのことばを守るなら、その人はいつまでも決して死を味わうことがない』と言う。あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのか。アブラハムは死んだ。預言者たちも死んだ。あなたは、自分を何者だと言うのか」

アブラハムも預言者たちもみな死んでしまったではないか、と彼らはイエスに言った。それなのに、だれでもイエスのことばを守るなら、「**その人はいつまでも決して死を見ることはない**」と言うのである。

彼らには、「肉体の死」と、「霊的な死」、「永遠の死」の区別がつかなかった。主が語っておられる死は、「肉体の死」ではなく、「霊的な死」であり、また「永遠の死」のことである。

ユダヤ人たちの言葉に対して、主はこう言われた。

「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光は空しい。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。この方を、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。あなたがたはこの方を知らないが、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしもあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っていて、そのみことばを守っています。あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見るようになることを、大いに喜んでいました。そして、それを見て、喜んだのです」

ユダヤ人たちは、神が自分たちの父である、と言ったが、本当は神を知っていたわけではない。しかし、今、彼らと話をしていたのは、父なる神を確かに知っておられ、その父なる神との交わりの中にいるお方であった。もしそのことを否定すれば、ご自分が偽り者となると言われた。

アブラハムを議論に持ち込むことをどうしてもユダヤ人たちが譲らなかったので、アブラハムも実はメシア（救い主）到来の日を待望していたこと、そして実際に信仰の目で「それを見て、喜んだ」のだ、と主は言われた。

それでは、いつ、アブラハムはキリストの日を見たのだろうか。おそらくそれは、イサクをモリヤの山に伴い、全焼のいけにえとして神にささげようとした時であると思われる。

「メシアの死と復活」というドラマの全体が、その時に目の前で繰り広げられたのである（ヘブル11:17-19）。アブラハムはそれを信仰によって理解した、と考えられる。このように、主イエスは、メシアに関する旧約聖書の預言すべてを成就しているのがご自身である、と主張されたのである。

（４）アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』

しかし、この主の御言葉も、ユダヤ人たちには理解できなかった。彼らはこう言う。

「あなたはまだ五十歳になっていないのに、アブラハムを見たのか」

イエスはまだ50歳にもなっていないではないか、と彼らは論じた（実際は、この時イエスはまだ33歳くらいにすぎなかった）。そのようなイエスがどうしてアブラハムに会ったと言えるのだろうか。

ユダヤ人たちの無理解に対して、主イエスははっきり、ご自分の先在を主張された。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』なのです」

この『わたしはある』と言われた言葉は、昔モーセに現れた神が、ご自分のことを「存在の根源」を意味する「**わたしはある**」（エゴー・エイミー）と言われたあの言い方と同じである（**神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」**／出エジプト記3:14）。主イエスは永遠の神であることをここで宣言なさったのである。

（５）イエスは身を隠して、宮から出て行かれた

ご自分を神と等しいとするイエスの主張を、神への冒涜と思った彼らは、石を取って主イエスを殺そうとした。

「しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた」

この「**身を隠す**」というのは、逃げるという意味ではない。「**隠されて**」という意味であるから、これは主の全能の力によって、怒り狂ったユダヤ人たちには見つからずに隠されて、宮を出て行かれたという意味である。主が十字架につけられる時がまだ来ていなかったからである。